

電話のベルが鳴った。細君からだ。

「今、府中の伊勢丹です。8 階でねえ、大きな古本市が開かれているの。近郷近在の店が 10 軒以上も集まっているのよ」

「それがどうしたって言うんだ」

「あるのよ。貴方がうわ言のように言ってらした本が。なんだか分る？」

「……?? わからねえな。何があったんだ」

「坂本さんの文集なのよ」

「本当かあ！ 繁二郎さんかあ。本当ならそいつあ掘出物だあ。直ぐ買え」

「それがねえ、定価 1,500 円なのが 5,000 円なの。だから電話したのよ」

「馬鹿！ 10,000 円でも安いよ。直ぐ買って来てくれ」

携帯電話など持たぬわれわれなので、こんな問答をしているうちに買い手が着いちゃったら困るな、と思っていたら、呑気な細君から、10 分も経ってから電話があった。

「買ったわよ。分厚くて、重い重い。これじゃあ、買物も面倒なので直ぐ帰るわ」

菊判布張り、箱入りの豪華な限定本である。昭和 31 年 9 月 20 日印刷、9 月 25 日発行、定価壹千五百圓。中央公論社発行。石井鶴三さんの編集である。箱に入れたまま、48 年間一回もページを開かなかつたらしく紙質が多少変色して入るが、新刊に等しい。古臭くなったのは箱だけである。或は数年前、中央公論社が経営不振になった際、所蔵本を放出したときの一冊かもしれない。

文章だけで 304 ページ、書簡、年譜、跋、後記を加えると 439 ページの大冊である。何処をパッと開いても、深沈・深遠な言葉、痛快・愉快的な言葉が眼に飛込んでくる。

「街で皮の上着を見付けて買って、それが便利なもんでスケッチに出かける時も、旅行する時も、いつもそれを着て居ましたが、後で聞くとところによると、それは仏蘭西では掃除人夫のみが着るもんだと言ふことでした。」(昭和 30、12、談)「他人の芸術に対する崇拜は自己の半面にのみ、貧しくとも自分は自分である。」「物はよく体得される程却ってそこから遊離し得る。」「墮落も向上も冷たい心から見ればどうせ同一物であらう。」「批評に乗る畫は既に平凡也」(大正 3 年 7 月・「みづゑ」、漢字、仮名使いは原文のまま)

余り日頃の心がけが良くないのに、どうして神様はこんな有難い贈物をを恵んでくれたのか、としきりに思っている。細君に「お前さんのおかげだよ」と万に一つでも言おうものなら大変なことになるので、毎日静かにページをめくっている。

(2004-3-17)